



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2017

vol. 25

主体的な学びのために

教育開発支援センター長 関口 理久子



毎年新入生の導入教育である専門科目のクラスを担当し、学生に課す課題がある。テーマは、私の研究テーマでもある「記憶」から選ぶことが多い。まずは様々な記憶の検査・測定・実験方法を学生たちに体験してもらおうのだが、課題の真の目的は、自分自身を知ることであり、心理学という学問領域で、ところを測ることの難しさや楽しさを発見してほしいということである。しかし、このような授業で毎年のように学生たちが必ず私に対して発する問いがあり、それは、「自分の記憶力は悪いのではないか」ということである。記憶力が悪いと試験の成績も悪くなるし、結果として自分は頭が悪いと思われるのではという心配がどうも彼らの問いの根底にあると感じる。

DRMパラダイム (Deese-Roediger-McDermott paradigm) という記憶検査方法がある。これは、虚偽記憶を生じさせると言われてきた方法であり、この手続きでは、特定の単語 (ルアー語、例えば「希望」) を連想させる単語リスト (リスト語として、例え

ば「将来」、「夢」、「ふくらむ」など) を提示した後に、提示された単語を報告させる。その時、リストで提示されていなかったルアー語 (例では、「希望」) を誤って「思い出した」と報告すると、虚偽記憶が生じたということになる。学生たちにこの課題を行うと、自分が正しく単語を思い出さず、虚偽の単語を思い出した、すなわち、誤りを犯したことに気付くことになる。そこで、先述したように、「記憶力が悪いのか!」という心配が生じるのである。

しかし、これは果たして記憶力が悪いことになるのだろうか。虚偽記憶を報告した人は、記憶力が悪いのではなく、言語的な概念形成の能力が高く、抽象的に思考できる人なのではないか、そして、そもそも虚偽記憶を生じさせるパラダイムとされてきたものは何を測っているのか、という疑問が私も含め記憶研究者の中では最近言われだしているのである。

大学入学までの学校の授業は、多くが「憶える」を軸に展開している。当然大学で

も基礎的・専門的知識を憶えることは重要である。しかし、学生たちは単に憶えるだけでは満足できず、知識をまとめ体系化し、そこに意味を見出そうとする。さらに理解を深め新しい学び方を展開しよう、得られた知識を実践しようという者もいる。教員の側も、主体的な学びとは、「憶える」を超えたところにあるのはわかっている、ではどのようにすればそれが達成できるのか、試行錯誤し戸惑うことも多い。

上述したパラダイムに疑問が投げかけられたように、大学教育もまた常に見直され、新たな展開がその都度丁寧に試みられなければならない。教育開発支援センター (CTL) では、4人の専任教員が中心となり、17人の研究員とともに、教育環境、教育支援、FDなどに関する複数のプロジェクトが行われている。CTLの使命は、どのような新たな方法が可能なのかを学生、職員、教員に提示していく、そして、自ら率先してそれらの方法に取り組むということであると考えている。

フォーラム・セミナー報告

ランチョンセミナーを開催しました

◆第24回・25回ランチョンセミナー

(担当: 千葉美保子 教育開発支援センター研究員)

2017年10月18日・20日に、ランチョンセミナー「知って得する評価のいろは(1)～ルーブリックを体験してみよう～」を開催しました。

今回のランチョンセミナーでは、学習成果を可視化する評価ツールとして注目されている、ルーブリック評価に関するミニレクチャーと体験ワークを実施しました。

まず、ルーブリック評価の基礎的な情報や活用事例を紹介後、ルーブリックの模擬体験として、同じ課題で作成された3種類のレポートを実際にルーブリックで評価し、その評価をペア・全体で共有するワークを行いました。

参加者からは「ルーブリックについて深く学

べた」という意見のほか、「自分の考えを見直す機会となった」「『自身の評価』を評価することができた」など、参加者同士で意見交換を行うことで、リフレクションの機会ともしていただくことができました。

また、「このテーマでずっと掘り下げたい」という声も寄せられました。今後もルーブリックをテーマとしたセミナーを継続的に実施してまいりますと考えております。

(教育推進部 千葉美保子)

日時: 2017年10月18日(水)・10月20日(金) 12:30～13:30
場所: 第2学舎1号館3階 A304・A303



ランチョンセミナーの様子

◆第26回ランチョンセミナー

(担当: 紺田広明 教育開発支援センター研究員)

10月26日(木)に開催したランチョンセミナーでは、「卒業生は満足しているのか!?～教学IRによる卒業時調査から見えてくる学生の姿～」と題して行いました。教職員11名の方々にご参加頂き、卒業時に実施している学生調査の結果から、学生の満足度について教職員で考えることに焦点を当てました。近年、教育の質保証が求められており、大学生として、何を学び、何を得たのかに関

心が高まっています。教職員としては、指導や支援した学生達が、どのような体験を経て、どういった力をつけて卒業していくのか、気になる場所であると思います。卒業時調査の結果から見えてくる学生達は、大学満足度95.0%、学部満足度94.5%(満足している+やや満足している)という高い満足度を示していました。また、専門教育や授業方法、相談支援等が満足度に関連している

日時: 2017年10月26日(木) 12:30～13:30
場所: 第2学舎2号館5階 C501

とが伺えました。セミナーではこれらを共有した後、ご質問を頂く時間となりました。学部ごとの違いはあるのか、どのような点が他の大学とは異なるのか、等のご質問を頂き理解が深まりました。本セミナーでの情報共有により、これからの関大の教育について一緒に考えていく一つのきっかけとなったのではないかと考えております。

(教育推進部 紺田広明)

日常的FD懇話会を開催しました

◆第16回日常的FD懇話会

(担当: 多田泰紘 ライティングラボ アカデミック・アドバイザー/教育開発支援センター研究員)

2017年11月21日(火)に第16回日常的FD懇話会「ご利用は建設的に! 学生のライティング学習支援のニーズと学びを促進する支援体制の構築」を開催しました。今回は、関西大学ライティングラボが行っている学部学生のライティング(レポートや卒論などの文章作成)に関する学習支援業務とそのニーズ、課題について教職員の方に知っていただくとともに、自律的な書き手を育てるための学習支援について議論しました。議論の中で、「読み手を意識した」書き方や、ラボと教員との連携のモデルケースを紹介する、といった

ご意見・ご提案を頂きました。私も議論に参加し、新たな視点で学習支援を考えることができました。

今回の懇話会を通じて、ライティング学習を促進するためには、教職員間の良い意味での遠慮がない意見・提案が有意義であることを改めて実感しました。懇話会で頂いたご意見・ご提案を今後のライティングラボの学習支援に生かしていきます。

日時: 2017年11月21日(火) 16:30～17:30
場所: 第2学舎2号館4階 C401



日常的FD懇話会の様子

■問い合わせ先 (ライティングラボ利用ガイドンス・授業連携についてのお問い合わせ)

関西大学ライティングラボ (教育開発支援センター内)

URL: <http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/index.html>Mail: wlabo@ml.kandai.jp

担当: 多田 (内線 3801)

Learning Caféを開催しました

◆第1回Learning Café

(担当：佐々木知彦 教育開発支援センター研究員)

アカデミックスキルの基礎を身につけるミニワークショップ「ラーニングcafé」。秋学期も「文章を読むコツー速読と要約」からスタートしました。繰り返し開催してきたテーマですが、今回はより実践的なトレーニングを取り入れました。その結果すべての参加者が、ワークの序盤と終盤では同じ時間で読める量が増えていることを確認できました。アンケートでも「内容に無駄がなく、ためになることばかりだった。

時間も短くて集中できる。雰囲気が楽でよい」との声があり、好評のうちに終了することができました。

今回は日本語の文章を扱いましたが、英語の速読についても取り上げてほしいとの要望もあり、検討中です。今後もさまざまなテーマで展開して参りますのでご期待下さい。

(教育推進部 佐々木知彦)

日時：2017年10月11日(水) 14:50～15:50
場所：凜風館コラボレーションコモンズ



Learning Caféの様子(10月11日)

◆第2回Learning Café

(担当：千葉美保子 教育開発支援センター研究員)

2017年10月18日に、Learning Café「明日の講義から使える!『ノートの取り方』のコツ」を開催しました。

今回のLearning Caféでは、大学での学びに重要なスキルである、ノートテイキングをテーマとしました。

まず、高校の授業と大学の講義の違いを確認した上で、講師から具体例を提示しながらノートの書き方についてのミニレクチャーを行いました。その後、参加者は5分程度のミニ講

義を聴き、実際にノートを取る作業にチャレンジしました。

春学期のLearning Caféでは参加者の多くが1年生でしたが、今回は上級生の参加が目立ちました。参加者からは、「板書を写すだけではノートを見直してもわからないが多かったが、疑問点を書き留めることで、忘れ辛かった」「コーネル式ノートを友達に進める時にどういう風に話せば伝わるかということも教えてもらった」など、今後の講義へ向けた前

日時：2017年10月18日(水) 14:50～15:50
場所：凜風館コラボレーションコモンズ



Learning Caféの様子(10月18日)

◆第3回Learning Café

(担当：多田泰紘 教育開発支援センター研究員)

2017年10月25日(水)にLearning Café「プレゼンの基礎-口頭発表のコツ-」を開催しました。授業や研究発表、面接など学生生活の様々な場面で必要になる「プレゼン発表」について、聞き手にも話し手にもやさしいプレゼンの作り方、発表方法のレクチャーとワークを行いました。

まず簡単なレクチャーを行ったあと、参加学生に話しにくいスライドと話しやすいスライドの違いを体験してもらいました。学生はいきなり話すことに戸惑っていましたが、緊張しても上手

く話せるスライドについて考えることができたのではないのでしょうか。次に、講師である私がレクチャー内で使った、聞き手を会話に引き込む話し方をクイズとして出題し、参加者に当ててもらいました。クイズを通じて、自己紹介や質問の誘導を取り入れた聞き手を巻き込む口頭発表のコツを紹介しました。話し手と聞き手の会話を促すプレゼン発表がもつ、やさしさと使いやすさと心強さをお伝えできたと思います。

今回のLearning Caféが、学生にとって話しやすい口頭発表につながれば嬉しい思い

日時：2017年10月25日(水) 14:50～15:50
場所：凜風館コラボレーションコモンズ



Learning Caféの様子(10月25日)

書籍紹介

『教育の方法と技術—学びを育てる教室の心理学—』(2017年10月にナカニシヤ出版より発行)

本書は9名の大学の研究者と5名の小・中・高等学校教諭や学校心理士・臨床心理士による、研究と教育現場の合作であることに特徴を持つ。教えること・学ぶことに関わる学習観や教授・指導観、知識をどうみるかという知識観を概観した上で、具体的な教えることの工夫・その技術、特に学びを育てる教授法としてのアクティブラーニング、学びを育てる環境としてのラーニ

ングコモンズ等の設計の重要性に触れ、ICTを活用した授業の基本的哲学、具体的な活用スタイルの紹介がされている。またそうした教育活動の振り返りとしての教育評価の方法、特に質的な評価の在り方も述べ、本書を手にする者がすぐにも教育研究に取り組めるよう質的研究法の概説も行っている。これらの章の合間にコラムで、現場の教師・臨床心理士等の実践も生々

しく紹介している。

教職科目の教育方法・技術論のテキストとして編纂したものであるが、教育の質の向上に関心を持たれるすべての方の目に触れていただきたいと願っています。

田中俊也

(前・教育開発支援センター長：文学部教授)

本書は、田中俊也前教育開発支援センター長に加え、教育推進部森房子教授および岩崎千晶准教授が執筆者となっております。



ANAとの合同交渉学ワークショップを開催しました

Learning Assistant

LA 活動報告

日時：2017年10月28日(土)11:45～17:00 場所：羽田空港第2ターミナル

羽田空港内のANAの人事部・人財大学の交渉学研修に本学学生2名(法学部3年井上宗知さん、文学部3年上田綾香さん)と教育推進部山本敏幸が参加した。ANAでの交渉学研修は、富士ゼロックス株式会社の阿部氏の支援により実現したものであり、7月のIBMで開催されたものに引き続き、今年度2回目の企業との合同交渉学ワークショップであった。

午前中は、ANAの日常業務の裏側(国内便運行前の打ち合わせ、出発時刻に合わせた駐機の段取り、空港上空を運行中の旅客機との交信など)を各担当者のすぐそばで見学させていただいた。安全運行が当たり前の日常業務の中で、俯瞰的に業務全体の流れを考えながら、各自の担当部分について多くを学べた。

社員用レストランでの昼食後、午後は、ANAの人事部・人財大学の幹部の皆様及び富士ゼロックス社VHPの方がたとの交渉学の研修に参加した。

山本からは、関大・交渉学の基本的な考え方について報告した。学生たちはインパクトある関大・交渉学の学びについて自分たちの習得したことをプレゼンした。阿部氏には、これまでの交渉学研修で交流のあった学生の成長をご確認いただいた。学生たちのプレゼンの後では、ANAの人事部の方々との距離も一気に縮まり和やかな会話が弾んだ。

今後は、ANA人事課人財大学のスタッフとの「英語力を活かした交渉学のテキスト」の共同制作、人財大学の研修生と関大生の合同交渉学ワークショップを計画していく。

(教育推進部 山本敏幸)



羽田空港のANA社員用出入口(ガンダム口)で集合



学生から見た関大・交渉学についてプレゼン

■スケジュール

12:00 羽田空港第2ターミナルツアー	(15:10 - 15:45 模擬交渉 (1対1))
12:40 昼食	(15:45 - 15:55 感想戦 (1対1))
13:40 交渉学交流会 (学生はプレゼンター兼受講者として参加)	(15:55 - 16:25 全体フィードバック)
(13:40 - 13:45 インタロダクション)	(16:25 - 16:50
(13:45 - 14:10 交渉学の基礎)	関西大交渉学事例紹介：関大・交渉学の展開についてプレゼン)
(14:10 - 14:35 事前準備 (各自))	(16:50 - 17:00 クロージング / アンケート)
(14:35 - 15:00 作戦会議 (チーム))	17:00 終了
(15:00 - 15:10 休憩・移動)	17:30 - 20:00 懇親会

From CTL事務所

私の周りにはいつも音楽があった。

【幼少期】物心がついたころには家の中

でも車の中でも音楽がかかっていた。

【小学校】いつしか聴く側から演奏する側になっていた。ピアノ、リコーダー、鉄琴・木琴、ハーモニカ。そして3年生の時に運命的な出会いをする。そう、トランペットに出会ったのだ。小さな背丈で重たい楽器を持って一生懸命吹いていた。演奏会やコンクールにも出場した。汗だくになり難しい隊列を組みながらマーチングも行った。

【中学校・高等学校】6年間吹奏楽に打ち込む。朝から晩遅くまでトランペット練習に励んだ。先輩と後輩の規律や音楽の基礎(楽典)もここで学んだ。ここで一生の財産となる友人とも出会った。苦楽を共にし喜びも悔しさ(涙)

も一緒に経験した。様々な経験から大きく成長ができた時期だと思う。

【大学】4年間、交響楽団に在籍した。中学や高校の時のようにトランペットだけというわけにはいかない。大学での講義はそれまでとは雲泥の差で困難を極めたからだ。大学生の本分は学業だ。もちろんそれは否定しない。だが、交響楽団に在籍し楽器を通じて、組織(楽団)運営や人とのコミュニケーション(協調性)を学んだ。

【社会人】大学卒業後しばらくブランクはあったが、一般市民管弦楽団に所属し、毎週音楽の世界に没頭していた。子育ても忙しくなり今はそれもできなくなってしまった。残念なことではある。

振り返ってみると、いつもそこには音楽があった。音楽を通じていろいろなことを学んだ。私にはそれがかけがえのない大切な財産だ。

学生の皆さんには大学4年間で何かひとつ人に話せるようなことを作ってほしいと思う。汗水垂らして努力して取り組んだことは絶対に裏切らない。その人の人格形成に大きく寄与することとなる。

何をしてもいいか分からないという人は授業支援SA(スチューデントアシスタント)にチャレンジしてみてもどうか。先輩・後輩を含めて243人の大所帯である授業支援SAは、学生が学生のために授業サポートをするやりがいのある仕事だ。大学のミッションである教育・研究・社会貢献の発展を教員・職員とともにその一端を担うのも面白い仕事だと思う。

時間は有限であり皆に平等に流れる。4年間(約3500時間)を大切に過ごしてほしい。これは拙い私の経験から言えることで学生の皆さんに声を大にして伝えたいことだ。

(よし)



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-1513 FAX: 06-6368-1514

<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日/2017年12月22日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター